

3

Mt. Nametoko was a very huge mountain, and there were always thick clouds or cold layers of fog at the summit throughout the year.

Halfway up the mountain, there was a big waterfall and there had lived many bears a long time ago. A gall of a bear in Mt. Nametoko was considered very useful for good medicine at that time.

A master at bear-hunting, Kojuro, was making his living from selling galls and furs of the bears he hunted.

Kojuro wore a rain-cape made from bark and tough shin pad, carried a gun and entered the mountain everyday with his burly dog.

Bears in the mountains observed Kojuro and his dog climbing up a rocky road from on top of the trees.

That day, Kojuro had killed a bear.

He carefully approached a bear that he had shot, and respectfully cut his body parts apart using a sharp knife.



5

“Oh, dear bear, I didn't kill you because I hated you. To be honest, I did not want to do this. However, I don't own any land to grow crops and have no other jobs even if I go to the village. If it was a fate that you were born as a bear, then same goes around for me, it was a fate of mine that I had to do kill you as my job. So dear bear, don't be born as a bear in your next lifetime.”

Kojuro always said the same thing after killing a bear. The bears understood Kojuro's feeling so no bears held strong hatred against him.

Kojuro felt sorry and had sympathy for the innocent bears that were murdered by himself. Before he noticed, he had felt like he could understand the bears' language.

On the same year when spring came, he went to the mountain with his dog before the leaves on the trees turned green.



なめとこやま は、それはそれは おおきな やまで、

さんちょうは いちねんじゅう、ぶあつい くもか、

つめたい きりに おおわれていました。

このやまの ちゅうふくには、おおきな たきがあって、

そのあたりに、むかし、くまが たくさんいました。

なめとこやまの くまの きもは、よくきく くすりとして、

とうじ ちょうほうされていました。

くまとりめいじんの こじゅうろう は、くまを とって、

そのけがわと きもを うって くらしをたてていました。

こじゅうろうは、おおきな からだに、きのかわで つくった

みのと、じょうぶな すねあてを みにつけ、

てっぼうを かついで、たくましい いぬを つれて、

まいにち なめとこやまに はいっていきました。

なめとこやまの くまたちは、きの うえから、けわしい

やまみちを あるく こじゅうろうを ながめていました。

そのひ、こじゅうろうは、くまを いっとう しとめました。

こじゅうろうは しとめた くまに ちゅういぶかく

ちかより、はものをつかって、

ていねいに くまを ばらしました。



「ああ、くまよ。おれは おまえが にくくて
ころしたわけじゃ ないんだ。おれも ほんとうは、
こんなことを したくないんだ。だが、うちには
はたけも ないし、さとに おりても、ほかに しごともない。
おまえが くまに うまれたのが いんがなら、おれも、
こんな しょうばいが いんがだ。やい、くまよ。おまえも
こんどは、くまなんかに うまれてくるんじゃ ないぞ」

こじゅうろうは、くまを ばらしながら、
いつも こんなことを つぶやいて いました。くまたちも、
こじゅうろうの きもちを よく りかいして いましたから、
このやまの くまたちは、だれも こじゅうろうを
にくんでは いませんでした。

こじゅうろうは、うらみも にくしみもない じぶんに
ころされていく くまたちに ふかく どうじょうし、
いつしか、くまの ことばさえも わかるようになった
きがしていました。

そのとしの はるも、まだ このはが あおく
ならないうちに、こじゅうろうは いぬを つれて、
なめとこやまに はいりました。

